風よい

大ノリ次第

山も霞みて春長閑く浪風静

成りわ　抑是ハ当今に仕へ奉

臣下也扨も三熊野を信し毎年

としこもり仕候此度ハ所願成就

致し候間急ぎ都へ罷らばやと

存候今都へ下向仕ハ数を渡ゆ

急ぐ成長閑なる春の空

濱乃真砂も以上満備して
り雑まてくも乳諸乃関こえて
是も其の一つ薬園の難波の里に
清よ母り里く　きみがよ歌
長柄の橋も津くるなる難波乃
春も幾久し　雪まも梅の花
こゝろわらゝ見え色濃き雪乃袖

廿三
き天長く地久しく神代乃
風も楽まつりるまひくくさぬ港
りし我侍代乃花ひ詠なく国まで
恵を見民哉なりて四方におよ
中の数八島の浪静まるら八月影
春乃影ゆうりあ為時こうや
十前
春ね庭小若菜摘て万代を

上哥
〽旅なる心うきふしの〳〵
あまの浪ひろき藻塩構ゞしきら
塩まさや越路の直なる道代を
あふの空と関乃戸さして守里
きの又がまゝ照に月影かく
ワキ詞
〽是は西国方の人にて候ぬ
手形は
シテ詞
〽此郎に蒸手まゐり
何事にて候ぞ
ワキ
〽かゝるきや所
旅人よう多き中に是なる梅の
木は何とて候れしくばいると清め
賞翫し給ふらん承まはりたく
〽さればこそ此梅は名木にて候
シテ
〽待ち給へ見る人ごとに是を袖
座をめでて養満よそいて

さきとなる梅花を讃えしく
此木の名残は濃々と絶えなむ
様よこう行へ　また方乃春は
尉木この盛ハ折々色の葉の
中ま式初かまは梅花を春乃兄
咲り色　雲上梅の匂ひく
園に難も多くまづ菅乃臥濃

うへ哥まも難波乃梅にて讃まし
よう折　代々もひろまし栄花と
いひ　菅きも春のれいとは
兄にも蘭もつの園ところや郁
路乃なよほまろ残えて咲や
このり歌残久本りとの詠みあ
ぞあろーき流り歌　実く

難波乃梅の名づみ木やむかしこ
見ぬ歌の道なりけりな
花ハ歌にも難波津に咲やこの
も冬籠りハ春邊と咲やこの落
花乃春を知らするより家々の心を
以うなかるうわうかうけ徳門を
ふかへ弄びてハ言葉ハあらりまし

達難波の徳子を皇子那りし
ごとく位よけまゝ路ハいつれ咲
梅乃花落ことし徳ハ位をへて
難波の君が位に備なわ給ひし
時ハいにしへ時乃華のごとく
天下乃りるまゝ治しめきは
今を盛と咲やこの華の

霞ハおかゝ浦斎もに
らへう大衣風しおきまわ
立波も難波よ咲やこの花
冬籠くじハ今迄小白あて
ふきさ梅乃風枝を鳴らさぬ流
代とや実や流衣国のなりけ乃
ずよ萬るゝ豊なる風よ能ためし

あうぶ実ハ被浅治めなきし
標なる陰乃影ハ浅門の浜
ずめさる山影雲霧ハぶう遠め濃
かゝ迷雨ゝなわ昔唐国乃
尭舜乃代代よりかさらし便ゝ
万機のまつりごとハ今たやすくよ
しく恵ミ乃浪四海よ普く治め

さらはまたいつし君てよ秋八
彼もみだれよく船を安りとめや
うきや小乃おわわて見まえ烟
た民の竈八よきりひにかわ
悦び数画にの逢万くも尊なく恵
御天乃治ば能まハ此君ほ世ゝ小
為めしなひくるり良実の歎なぬ

見ことのわが國てにあまねく三
年深法調由はさ神しば四季月も
極まり大演乃玄妙の教様つこて
雲八尊年孔中調鬼中也可故
もや中にば詠謡よそうち渋宝辰
千秋萬歳乃ちはやのまつをまつ不
能八善きみゝ縁辰にはなし見

深うしてハ流るかさ浪も閑く
び諸きハ恵筑波山の陰よりも
ぎりし茂ハ大君の國なれバ
ある其成業ハさしも四海の國
の難波乃梅の名も一部に匂も
四方丹あまねく一色をまハ
天下を那ざをさまや万代乃なを

安全ぞめでたき幾萬代乃
春秋もつゞぎりへひさし哉
かゝる津乃昔思ふぞ面白哉
八くなよし部に難波津よ香濃
一聲木しもに鳴鶯乃春なる也
春鶯囀なそうきせ不思議や
は乃衆なまはゞめく心有花の色

蓬莱なりけり舞ふなるよし御代

氣可や此梅のもとに於て華乃精

ひとりの人乃やへは以て乃心に

難波津よ咲やこの花と詠し

はしめ位を定め申しし百済国乃

王仁なをやはまもこのり那毎

たまふあきもしせ入れわのあり

うくひすの囀乃可ひにむかふ紫

風めかはしや下似し梅か竹人

花のさかりにまちたまへ

雅の以ひしりの乃ちに東よりの二

来るといふ古枝花りしめ家

ひろく愛くにも西乃海よ向ふ

難波の表きら月梅いもとにふ世

うつゝ浪ばよ為乃舞樂ぞ面白や
夢ばしさまし拍ふ那よ見れバ
難波が浦よ寿代へてかゝる備
色々の恵ミを安くかゞみの鏡
さくや姫乃神異なるの里ぞ云
百済國よりわが國にわたりわが君が
おさめ國を告ぶ王に覚いり

其人なかや肴に酒乃はまれ
ばだのかゝ見のうき袋はし
浴中のつ流代浪榮花をなしても
此乃色の香ハひろく備
さらゝ乃難波乃るしめ
波なりぬ遊ひたハみきかゝ養
舞樂面白や梅のえにきの臨

管絃て以久も雲井に〔?〕

鼓乃音も〔—〕ておよすくゞ人ら

かくれハ君乃代よ栄〔—〕鼓〔?〕

時雨の私わ覚ふる衆浪乃

鐘もしく〳〵さめ〔?〕寿のかうハ寿し〔—〕伊勢〔?〕

浪打寄せて入江乃松風通ふ

萬歳楽音何までも悦ひの湊

様鼓音し〔—〕数波の音も寄りて

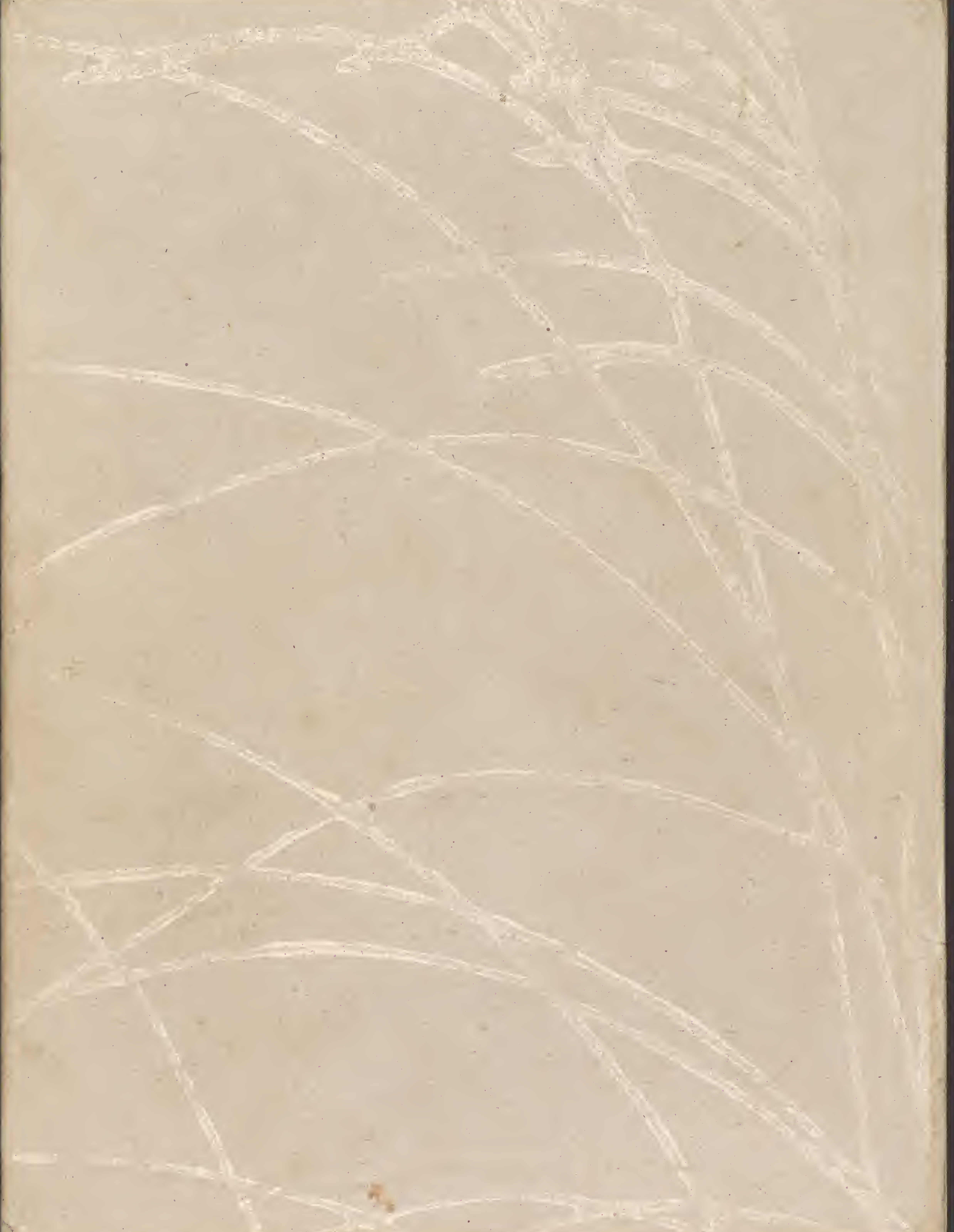
待代なるの孫やま〔?〕慈面白乃

萬楽や時調子小のさヽわて

妙の萬歳楽まで久のさと

読にも咲をなしてとり悦まひ

秋風来の川小座〔?〕を

しらさくま渡ひ〔?〕し〔—〕とうさ

かゝる 萬歳楽ハ いつの津まにも
東海波とも 四海のなかへうた
すまのはハ 採桑も 抜頭の出る
陵王は入日を返す
手よく ゞ乃太鼓ハ 浪かさね
どうわらに 響うちらの曲 うたうちら
ご詠斎楽ふ ねりれて 風人
治代に あさ出ず天下 泰平の もやし治
世の風天下 泰平 わ治世ぞ 萬歳
楽 うめでたく